

## 教会暦と聖書の流れ

イエスのエルサレムに向かう旅の段落の中で、ずっと語られているのは「神の国」についての教えです。この神の国には、「今すでに始まっている」という面と、「世の終わりに現れ、完成する」という面があります。終末における完成ということの中には、神に反するすべてのものが滅ぼされる「裁き」の面があります。先週の箇所(ルカ 12 章 32-48 節)もその裁きについての警告の言葉でしたが、きょうの箇所でも、非常に厳しい警告の内容を持つイエスの言葉が集められていると考えたらよいでしょう。なお、51-53 節はマタイ 10 章 34-36 節に似た言葉があります。

## 福音のヒント

(1) ここでイエスがおっしゃる「火」とは何のことでしょうか。この箇所だけから考えるのは難しいのですが、ルカ 3 章 16 節に洗礼者ヨハネのこういう言葉がありました。

「わたしはあなたたちに水で洗礼を授けるが、わたしよりも優れた方が来られる。わたしは、その方の履物のひもを解く値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる」。

この「火」は一方では神に反するものを滅ぼしつくす「裁きの火」です。ただ、この見方だけではルカ 12 章 49 節の「その火が既に燃えていたらと、どんなに願っていることか」との結びつきは理解しにくくなります。この「火」は「聖霊」とも結びついています(使徒言行録 2 章にある「炎のような舌」は聖霊のシンボルです)。ここには「清め」のイメージもあります。「火」は、聖霊によって人に罪のゆるしをもたらし、神との結びつきを確かにする「清めの火」でもあると言えます。きょうの 50 節で「受けねばならない洗礼」のイメージが続いているのはそのためでしょう。



(2) 「平和」はヘブライ語で「シャローム」と言います。すでにイエスの誕生の場面で、天使たちはこう歌いました。「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ」(ルカ 2 章 14 節)。イエスによってもたらされるものは本来、平和であるはずですが。この平和は人と人とが本当に尊重し合って生きるような、神から来る平和だと言えることができるでしょう。これに対して、「わたしが地上に平和をもたらしのために来たと思うのか。そうではない。言っておくが、むしろ分裂だ」という時の「平和」は争いが避けられ、表面的に平穏が保たれているだけの状態だということだと言えます。

イエスの到来とそのメッセージは、人々にはっきりとした態度の決断を求めるものでした。それは、イエスによって始まっている神の国を受け入れるか、それを拒否するか、という決断です。そこには表面的な平穏さを保つだけではすまないものがあります。

(3) 53節はミカ7章6節の引用だと考えられます。「息子は父を侮(あなど)り／娘は母に、嫁はしゅうとめに立ち向かう。人の敵はその家の者だ」。これは人々の中に悪が満ち、もはや親しい者さえも信じることができないという終末の混乱した状況を語る言葉です。これに続くミカ7章7-8節では、その混乱の中で主に信頼する人の生き方が示されます。

「しかし、わたしは主を仰ぎ／わが救いの神を待つ。わが神は、わたしの願いを聞かれる。」わたしの敵よ、わたしのことで喜ぶな。たとえ倒れても、わたしは起き上がる。たとえ闇の中に座っていても／主こそわが光。

終末についての聖書の教えは、神が人間の間には混乱や分裂を引き起こすということを語ろうとしているわけではありません。現実にはどのような混乱や分裂があっても、それを突き抜けて神の救いが実現する、という希望と確信を表すものなのです。

(4) 「五人」の家族というのは、両親とその息子、娘に、息子の嫁を加えた家族の姿が考えられているのでしょうか。だとするとこの対立は、親の世代と子どもの世代の間の対立であるという見方もできるかもしれません。それは、イエスご自身や弟子たちが経験したことでもあったようです。

「イエスの母と兄弟たちが来て外に立ち、人をやってイエスを呼ばせた。大勢の人が、イエスの周りに座っていた。『御覧なさい。母上と兄弟姉妹がたが外であなたを捜しておられます』と知らされると、イエスは、『わたしの母、わたしの兄弟とは誰か』と答え、周りに座っている人々を見回して言われた。『見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ。』(マルコ3章31-34節)

「また、少し進んで、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、舟の中で網の手入れをしているのを御覧になると、すぐに彼らをお呼びになった。この二人も父ゼベダイを雇い人たちと一緒に舟に残して、イエスの後について行った」(マルコ1章19-20節)。

このような場面を思い起こすならば、この対立は、自分の家族の中でうまくやっていけばよいという態度と、神の子どもとして、すべての人と兄弟姉妹としてのつながりを生きようとする態度の間にある対立ということになるでしょう。

(5) きょうの箇所が語っているのは、いつのことでしょうか。最終的な裁きと神の国の完成の時のようでもあり、イエスが活動している今のことのようでもあります。また、「わたしには受けねばならない洗礼がある」という言葉は、イエスの十字架の時を特に意識させます(マルコ10章38-39節参照)。

今が終わりの時である、イエスの到来とともにすでに終わりの時は始まっている、ということはわたしたちにとっても大切でしょう。わたしたちの中にも分裂や対立という厳しい現実があるかもしれません。その中で神の救いが見えなくなることもあります。それはある意味で終末のような状況です。しかし、「対立して分かれる」(53節)ということがイエスの望みではないし、本当の終わりでもないのです。

内容的に言えば、きょうの箇所が続くはずの言葉は、「ただ、神の国を求めなさい」(ルカ11章31節)ではないでしょうか。だとすれば、「火」とは「神の国に対する熱い思い」だと考えることもできるでしょう。イエスがわたしたちに求めているのは、「その火がすでに燃えていたら」ということだと受け取ってみてはどうでしょうか。